

「京都御苑と相国寺」

2018. 9. 27～28

齋木 敏夫

京都駅（在来線）中央口に 10 時 30 分、21 名が集合し、地下鉄に乗り、鞍馬口駅で下車し、駅から少し西に歩いた住宅地に御花畑屋敷跡の表示板がある。

近衛家別邸 御花畑屋敷跡 上京区森乃木町

薩長同盟ゆかりの地で僅か 2 年前の平成 28 年 5 月に確認された処だ。決め手になったのは水路が有り、その水を利用した水車が有り、これにより精米が行われていたことであったようだ。近衛家と姻戚関係にあった薩摩藩家老小松帯刀(ﾀﾞｲｼﾞ)はこの別邸に居住していた。1866 年当時 禁門の変により朝敵となっていた木戸孝允(ｶﾀｼﾞ)一行が約 10 日間滞在し、西郷隆盛と会談し、坂本龍馬立ち合いの下で薩摩が長州の復権に尽力すること等が合意された場所だ。小松帯刀は当然この席に同席しており、その他亀山社中（のちの海援隊）設立をも援助している。今は住宅地となっており何の面影もない。

烏丸通を横断し、東南に向かって歩くと神社がある。

上御霊（かみごりょう）神社 上京区上御霊前通

平安時代になると御霊信仰が盛んとなり、早良親王他の御霊を鎮めるために創建された。1467 年 応仁の乱の発祥地 となり、社殿は焼失した。鳥居の先に楼門があり、そこをくぐり、唐破風の付いた本殿にお参りした。社殿は江戸時代中頃に再建されたものだそうだ。境内の一角に細川護熙氏揮毫の「御霊合戦旧跡」石碑があった。

相国寺

足利義満が開基で夢想疎石を開山として創建された禅寺で京都五山の第二位、義満は左大臣であり、左大臣の位を中国では相国(ｼョウｺク)と呼んでいたことから相国寺と名付けられた。平清盛も左大臣経験者で平相国と呼ばれていた。応仁の乱で伽藍は焼失、現在の法堂（重文）は 1605 年、豊臣秀頼の寄進によって再建されたものだ。法堂建築としては最古のものである。法堂の左側を歩いてゆくと中国風の鐘のかかった天響楼(ﾃﾝｷョウﾙ)がある。中国にある大相国寺との友好の証として 2011 年に建てられた新しい鐘楼だそうだ。その先を左に曲がったところにある墓地の一



角に藤原定家の五輪塔、足利義政の宝篋印塔、伊藤若冲の角柱の墓石が三つ並んでいる。元は別々にあったものをここに並べたそうだ。

昼食「ホテル ガーデンパレス」一階「京料理 花ごよみ」料理「花投扇」

「投扇興」は江戸時代に流行した遊びで桐箱の台に立てられた「蝶」と呼ばれる的に向かって扇を投げつけ点数を競うゲーム だそうだ。その投扇興をモチーフにした会席風弁当で桐箱が三段のお重になり、小鉢に種々の料理がきれいに盛り付けてある。残念ながら酒は飲めず。京料理をじっくりと味わった。

京都御苑

御苑の地は明治以前には公家たちの邸宅が建ち並んでいたところだ。御所に沿って北向きに歩き、東北の角まで行った。鬼門に当たり、角が切込になっている。棟の下に墓股が付き、そこに菊のご紋が付いている。

相国寺承天閣美術館

「サンタフェ リー・ダークスコレクション 浮世絵最強列伝 一江戸の名品勢ぞろい」が開催されており、見学した。浮世絵の祖は菱川師宣（1618～94）といわれ、もともとは本の挿絵を描く絵師でしたが、徐々にその絵が本の内容よりも人気となったことで、一枚摺の版画を制作するようになった。最初は墨摺（スミズリ）という黒一色の版画でしたが、絵に色を付ける工夫が施されるようになった。墨摺絵に直接色を塗る方法などが試みられましたが、量産することはできなかった。そこで発明されたのが「見当」でした。見当とは版木に付ける目印のことで、これにより色がずれずに色版を刷ることができ、多色刷りの浮世絵が作られるようになった。ちなみに「見当ハズレ」や「見当違い」の語源はこの浮世絵の見当が元となっているそうだ。菱川師宣の「衝立のかげ」から 葛飾北斎の「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」まで摺りの新しい素晴らしい浮世絵を楽しんだ。常設展示してある鹿苑寺大書院障壁画のうち「月夜芭蕉図床貼付」と「葡萄小禽図床貼付」（いずれも重文）は伊藤若冲が描いたもので素晴らしい墨絵であった。

境内から隣接する同志社の構内に入った。

同志社構内

室町時代には相国寺の境内、幕末には薩摩藩藩邸が存在していたところで明治になり、新島 襄夫人八重の兄山本覚馬は西郷隆盛とも親交があり、薩摩藩邸跡を譲り受けた。その地を新島 襄に提供し、同志社の敷地となった。B. W. クラーク夫妻からの寄付によって建てられたレンガ造りのクラーク記念館（重文）、チャペル（礼拝堂）（重文）を見て「ハリス理化学館」（重文）に入った。ハリス理化学館同志社ギャラリーとなっており、内部が見学できた。同志社の理化学教育の起源は1890年に正式開校したハリス理化学校に遡るそうで J. N. ハリスの援助により同志社が誕生したといえるそうだ。新島 襄の本名が七五三太（シメタ）であることをパスポートで知った。襄の名は海外でジョーと呼ばれたことによるものらしい。学食でコーヒーとパンをいただき、一休みした。この建物の床の一部がガラス張りとなっており、相国寺の建物の礎石跡が見えるようになっていた。

冷泉（れいぜい）家

今出川通りに面し、三方を同志社に囲まれた一画に冷泉家の敷地(750坪)がある。明治維新で殆どの公家が東京に移り住んだ中で京都に留まりましたが固定資産税の支払いにも窮したようだ。1970年代の学術調査で藤原定家の筆写した古今和歌集が見つかり、財界の支援で財団法人「冷泉家時雨亭文庫」が発足となり、存続できたようだ。

地下鉄今出川駅で初日の解散となった。病み上がりの小生は早めにホテルに戻り、翌日に備え体力の温存を図った。

二日目 「伏見、桃山御陵前あたり」

近鉄八条口に10時30分22名が集合し、近鉄京都駅から近鉄電車に乗り、桃山御陵前駅で下車した。大手筋通りの商店街をとおり、お城の石垣と白壁を思わせる坂道を上ると「黒田節」誕生の地のいわれを書いた説明板がある。黒田家の母里太兵衛が伏見の福島家に招かれた際の出来事が有名な民謡の元になったようだ。

御香宮神社(延喜式式内社)

筑紫の香椎宮から勧請したという記録があり、全国にある「香」の名前のつく神社は筑紫の香椎宮との関連性が強く、神功皇后を祭神とするようだ。

豊臣秀吉は伏見城築城の際に当社を城内に移し、鬼門の守護神とした。後に徳川家康によって元の位置に戻され、本殿が造営された。鳥羽・伏見の戦いでは官軍の本営となった。10月上旬に神幸祭が予定されており、境内はその準備であわただしかった。表門(重文)は1622年に水戸の徳川頼房が伏見城の表門を拝領して寄進したもので切妻造、本瓦葺の薬医門だ。屋根の棟には葵のご紋がついている。城の門は高麗門が多いが薬医門は珍しいなと思った。拝殿(府指定)は1625年徳川頼宣が建立、割拝殿となっている。入母屋造、本瓦葺で通路部分に唐破風が付き、色鮮やかな彫刻が施されている。本殿(重文)は吹き寄せの菱格子の透かし塀のなかにある。1605年徳川家康が建立、檜皮葺の屋根を持つ五間社流造、極彩色の彫刻がすばらしい。本殿に向かって左側に名水百選の一つ「御香水」がある。清和天皇から「御香宮」と名を賜り、境内から湧き出た水も『御香水』と呼ばれるようになった。この水は桃山の伏流水で伏見の地名の起こりとされているようだ。祭りの準備で忙しい中、神職が境内を案内してくれ、末社の中に東照宮と豊国社があるのを教えてくれた。

昼食 鳥せい本店

「神聖」の酒蔵の一棟を改装したお店で中々の繁盛店で既に待っている人たちもいた。建物は虫籠窓(ムシコマド)が付き、二階が低くなっている古い建物だ。予約してあるので一部屋が用意されていた。ノンアルコールビールを飲みながら串焼き等多彩な鶏料理を頂いた。酒蔵であるのに酒が飲めないのが残念であった

黄桜記念館(キザクラ カップ カンパニー)

伏見の酒蔵は老舗が多い中で黄桜(株)の創業は大正14年で百年足らずの会社だ。名前の由来は

鬱金(ウコン)桜と御衣黄(ギョウイロウ)桜の二本の淡緑黄の花が咲く桜の木があったことに由来するそうだ。現在は黄桜広場に鬱金桜のみが残っている。清水崑、小島功の両氏のカップの絵を使った宣伝が功を奏し、黄桜は一躍有名となった。地ビールも造っているとは知らなかった。ショット売りコーナーでは残念ながらバニラアイスだけで済ませた。

竜馬通りを通り、寺田屋に向かった。

寺田屋（史跡）

寺田屋は薩摩藩の常宿となっていた。幕末の1862年と1866年に事件を起こしている。

最初の事件は倒幕のクーデターを起こそうと計画した薩摩藩急進派30余名が寺田屋に集まった。一方島津藩主の父久光は公武合体論の慎重派で1000人の兵を率いて京都へ上洛した。そこで急進派を説得しようとしたが説得できず、已む無く、急進派を上意討ちとしている。二つ目が伏見奉行による坂本龍馬襲撃事件だ。この際龍馬は愛人「お龍」の機転により、辛くも脱出し、薩摩屋敷に逃げ込んだ。大名屋敷は治外法権の場所であり、奉行所は手出しができなかった。当時の建物は幕末の戦いにより、焼失し、現存する建物は明治になって再建されたものだ。中に入り、二階に上がり、当時の状況を想像した。部屋には龍馬の姿を描いた掛け軸や遺品が飾られていた。

寺田屋を出て宇治川派流にかかる橋を渡るとちょうど「十石舟」が橋に向かって来るところであった。橋の下を潜り抜けるのを見て川沿いの堤防を歩いた。

月桂冠大倉記念館裏の辺りで、一帯は京都市の「重要界わい景観整備地域」にも指定されており、テレビでよく見る景色であった。

長建寺

中国風 朱色の土塀があり、朱色の竜宮門をくぐって境内に入った。境内はかつての中書島遊郭の一角にあったそうだ。賤ヶ岳七本槍の一人の脇坂安治の屋敷がこの辺りにあった。彼の役職が中務少輔であり、その中国風呼び名が中書(チュウショ)であることから彼を中書さんと呼び、中書島の名が広まったそうだ。

月桂冠大倉記念館

初代大倉治右衛門が1637年、伏見に出て酒屋を開業したのが始まり、良質の伏流水に恵まれた当地は秀吉による伏見城が築かれて以来、大きな城下町として発展し、水運の整備も進み、京の中心部や大坂への交通の要衝となっていた。参勤交代も始まり、大名たちも逗留、船宿や材木問屋、運送問屋などが軒をならべる港町、宿場町としてもたいへんに賑わった。勝利と栄光のシンボル「月桂冠」が銘柄として誕生するのは1905年のことだそうだ。「酒造り唄」が流れる展示品室に入り、酒造用具類や資料を見た。「利き酒処」は素通りし、お土産売り場に行った。1合徳利の酒をお土産に頂き、帰路についた。

途中で伏見御堂、会津藩宿陣の表示がある。東本願寺の初代法主・教如が創建したのが伏見御堂だ。本堂は徳川家康の居城・向島城の殿舎の遺構を改築したものと伝えられている。幕末の1868年1月2日、鳥羽伏見の戦いの前日に、会津藩の先鋒隊約200名が上陸してここを宿陣としたようだ。現在はその御影もない。

伏見は酒蔵の多い街で幕末の戊辰戦争の舞台になった所で当時を思い浮かべながら楽しく散策が出来た。前日は旧相国寺の広大な境内とその近辺を巡り、楽しい二日間であった。